

## イザベラ・バード秋田の旅（10）大館編

2018年10月28日 掲載



イザベラ・バードが東京から旅の目的地である北海道の平取まで、北日本縦断に要したのはおよそ70日。山形や青森は1週間程度で通過したが、本県はその倍近い日数をかけている。道のりの長さに加え、雨でしばしば足止めされたのが原因だ。



1878（明治11）年7月22日から26日かけて、大館（現大館市）周辺は激しい風雨に見舞われた。遐邇（かじ）新聞（現秋田魁新報）によると、洪水で橋は流され、木は倒され、近くの墓地からは遺体が流出。田畑の損害も大きく「近年まれなる出水」だった。バードが大館に到着したのはこの2日後の28日。大雨の混乱は続いており、バードは足止めされた旅人たちと共に宿で2日過ごす羽目になった。

大館は藩政時代、城代が置かれた城下町。武士の住む内町、町人らの外町など整然とした町割が行われたが、バードが訪れた当時、崩れかかった家や継ぎはぎだらけの家々が立て込み、みすぼらしく映ったという。

大館市文化財保護審議会の清野宏隆会長（78）は「10年前の戊辰戦争で城下はほぼ焼失、その後も外町で数百軒が燃える大火が2度あった。バードは外町の宿に泊まったと考えられ、急ごしらえの家屋が目についたのでは」と推測する。

大館市史などによると、68年の旧暦8月9日、旧幕府側の盛岡藩が秋田領内に侵攻。22日に大館城は落ち、城下は29軒を残して大半が焼けたとされる。さらにこの年は凶作が追い打ちを掛けた。2年後、立ち直りかけた頃に大火が発生。相次ぐ災禍で、多くの人が損害を被ったことは想像に難くない。

そして今度は水害一。だが「日本奥地紀行」では、うらぶれた町の描写に対し、人々がうちひしがれた様子は見られない。満員の宿ではバードをいらつかせるほどにぎやかな宴会が開かれ、町の一角では大勢の鍛冶職人が仕事に励んでいた。

大館を出発した30日、バードは郊外の田畑で目にした農民の姿にくぎ付けとなった。辺り一面に散乱した石や流木を取り除いたり、堤防用の蛇籠を作ったりと復興作業に没頭していたのだ。その勤勉さは、度重なる困難を乗り越えてきた大館の象徴のようだった。



この日は前日までの雨から一転、快晴となった。北に向かう途中、バードは大館の町を振り返り、第一印象とは全く違う町の魅力を発見する。そして改めて日本の美しさを感じ入った。

「太陽がさんさんと輝き、大館の町が立地する山に囲まれた盆地を照らしていた。実に美しかった。…600マイルの旅をしてきたが、日の光を浴びて美しくないようなところはただの一つもなかった」（金坂清則訳注「完訳日本奥地紀行」より）